
ロード オブ ギャラクシア

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード オブ ギャラクシア

【Nコード】

N3338Z

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

永遠とも言える果てしなき世界を旅して、降り注ぐ幾億ものきらめき。

その1つ1つに、それぞれの歴史が綴られている事だろう……。

これは、そんなきらめきの1つに記された、英雄達の物語。

少年は旅立つ。

その旅路の中で、仲間を、友を見つけていく。

しかし、その仲間達には美少女が多かった!?

架空の大陸を舞台に繰り広げられる、ドタバタハチャメチャバトル
ラブコメ（ハートフルボッコ）ストーリーが今始まる――。

プロローグ（前書き）

蒼井水晶初のオリジナル作品です。
拙い文章ですが、皆様が楽しんで頂けることを祈っています。

プロローグ

ここは、我々が住んでいる世界とは少し違う世界。
その世界の中央には、巨大な大陸があった。

『ギャラクシア大陸』

それが巨大な大陸の名前である。

その大陸はその巨大さゆえ、果てを知らない。
いや、正確には果てが分からない、と言うべきか。
我々の世界より遥かに進んだ技術を持ってしても。

世界の果てには失われた楽園、伝説にうたわれた楽園、『エデン』
があると言われている。

その見果てぬ夢を目指して、多くの冒険家が旅立った。しかし、誰
1人として帰っては来なかった。

この大陸には、様々な種族が住んでいる。

人間族、ドワーフ族、エルフ族……などだ。

今、この世界で繁栄を誇っているのは人間族。

様々な種族を取り込み、肥大化して来た。

その人間達の主な大国は3つ。

^{エンパイア}帝国、ロンバルディア大陸同盟、ドラクシル王国。

この対立する3つの国は、国が成立してから、幾度となく争って来
た。

最大の国力を持つ^{エンパイア}帝国。

最大の軍事力を持つロンバルディア大陸同盟。

最強の兵士と武器を持つドラクシル王国。

その特徴と、地理的条件も合わさって、この争い合う3つの国は決
着がついた事が無い。

現在進行形で戦争中のロンバルディアとドラクシル。

100年前の『ホルスの大逆』以来、不気味な沈黙を続ける帝国……。

増え続けるビースト達……。

そして今なお蠢く闇の勢力……。

この混沌とした時代に、光を降ろす者は現れるのか。

それとも、『エデンの伝説』が見つかるのか。

それとも、『狼の日』が訪れるのか。

神話を繰り返す様な予兆。

そして……、世界は揺れ始める。

そこに、1人の青年が旅立つ。

光という信念を心に秘め、新しい旅に出る。

仲間と出会い、友と戦う。

何を信じ、誰と戦うのか、

その運命は、自分で決めなければならない……。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回にやっとな主人公が登場します。

それでは。

第一話 ― 青年 ― (前書き)

今回はバトルになります。
ヒロイン1人目の登場です。

第一話 ― 青年 ―

大陸の中央、やや下。

そこに帝国の首都、エンパイア^{エンパイア}IIシティがある。

そこには、人間だけでなく、エルフもドワーフも、はたまた、獣人族といった種族まで、種々雑多な民族が暮らしている。

ただ、最近は傭兵崩れの連中や、盗賊などが流入してきているため、治安があまりよろしくない。

そのため、帝国警察はスラム街への見張りを強化しているとかいないとか。

また、テロリストへの対応にも四苦八苦させられている。

まあ、本格的にエンパイアIIシティに攻め込むには、地方都市を突破し、外部城壁を突破し、無数の砲台や機関銃がついた城塞を打ち破り、内部城壁を破壊し、それでやっとこさ郊外へと辿り着く。

しかし、街1つが巨大な砦となっているため、突破するのは容易ではない。

エンパイアシティの中央、北西部。

治安が他の地域と比べると格段に良い。

帝国の観光地の1つである、エヴァンニ城があるのもここだ。

エヴァンニ城とは、帝国創世記の偉大な將軍、バルドー・エヴァンニ伯爵の名を取った2つの城のことだ。

しかし、100年前の『ホルスの大逆』以降、ビーストの巣窟となっているそうだ。

また、北西部には、若者が多い。

ここには、帝国軍術学校があるからだ。

帝国軍術学校、その大正門に青年は居た。

短い黒髪に狼を思わせる鋭い瞳。

細身だが筋肉質の体つき。

身長は170センチ前後だろう。

その瞳ゆえ、雰囲気に近い物がたい物がある、というわけでもない。全体的に穏やかな雰囲気に包まれた青年だ。

腰にはロングソードと拳銃が揺れている。

彼は、大正門前で何かを思案していた様子だったが、思い切ったように顔を上げると、セントラルストリートをゆつくりと西に向かって歩き始めた。

30分ほどたっただろうか、同級生や先輩と挨拶を交わしながら歩いていった彼が足を止めた。

そこには、アイテムショップがあった。

ただし、強盗団に占拠されていたが。

彼は目を細め、強盗団の全容を仰ぎ見る。

人数は5人ほど。

傭兵崩れのように、ボウガンやライフル、騎兵用のスピアをもっているようだ。

中央に居たのがひげ面で大柄な男。

周りの連中より一回り大きく、腰に下げていたのは、ロングソードではなかった。

グレートソード。それがその剣の名前。

両手で扱う大型の剣。

ロングソードの場合は、片手でも両手でも持てるように柄が工夫されているが、グレートソードは違う。その大きさのため、両手でしか振るえないのだ。

しかも、力の弱い人でも斬る事は出来るが、振り回すことはできない。

それを振り回す事ができるのは力の強い者だけだ。

ちなみに、遺伝的に力が強く、寿命も非常に永い竜人族はこの剣を

好むらしい。

彼は、ショップを包囲している警察の一群へ近づき、声をかけた。

「ここを占拠しているのは？」

「なんだなんだ野次馬か！邪魔だ邪魔だ、どけ！」

「大丈夫。俺は軍術学校の生徒です」

「ん……オホン！これは失礼した。何用かな？」

「ここを占拠しているグループは？とお聞きしました」

青年は響く様なテノール声で聞いた。

それに対し、警察官は、一度咳払いすると、報告書を読み上げた。

「アイテムショップを占拠しているのは、元ロンバルディア軍所属の傭兵達だ。」

今の二国間戦争はロンバルディアが優勢だ。大方、もういらなくなつて首を切られた、つてことだろうな」

「はあ……、はた迷惑な話だ。で、なんで突入してないんです？」

「それが、第一班と第二班は突入したのだがな、いいようにあしらわれて沈黙させられた。殺されてさえない。あいつらはどうやらただの飲んだくれではないようだ。戦場をわたつて来た猛者達だろう」

「なるほど……」

「どうするんだい？第三班はたった今、全員沈黙した。我々は今増援を呼んでいる。機動隊が到着するまであと30分だ」

「俺が行ってみます」

「やめたまえ、君の様な実戦経験も無い若者に勝てる相手ではない」

「案ずるより産むが易しっていうでしょう？問題ありません」

「む……」

遙か東の島の諺を引用しながら言った余裕綽々の笑みを見て、何かを感じ取ったのか、警察官は苦笑を見せ、『行ってこい』と手で示した。

「待ちたまえ！君の名前を聞いていなかった。教えてくれ」

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

その言葉を最後に青年——スタンリー・アークエッジはショップのドアを蹴破った。

「うっ……、酒臭え」

スタンリーは思わず鼻を押さえる。

仕方の無い事だ。そこには、『海賊の酒』と呼ばれる度数80度のドギツイ酒の瓶が転がっていたのだから。今、傭兵崩れの盗賊団は絶賛酒盛り中だ。

不満そうな見張りの2人を除いて。

スタンリーは息を止め、足下にあった酒の空き瓶を拾うと、ふつ、と息を1つ吐いて空き瓶を左の男に投げつけた。

「ぐあっっ?!」

見事命中。

「どオした!!」

空き瓶の割れる音を聞いて、大柄な男を除く3人が駆け寄る。

その駆け寄った隙に、スタンリーは乱雑に倒された商品の影へ身を隠す。

「また突入してきやがったのか、三度目はねえ! 皆殺しだア!」

と見張り——空き瓶を投げつけられてない方が大声を出すと同時に、スタンリーは腰の拳銃を抜いた。

『ミリタリー&ポリス…マークA』

それが拳銃の名前。

インベリアルガード

帝国防衛軍や、帝国警察に流通している実弾銃。

軍術学校で支給される銃だ。

かなり使い込んでいるのだろう、銃全体が黒光りしていた。

安全装置を外し、残弾数を確認。

——昨日マガジンを変えたばかり。問題は皆無。

一瞬の思考の後、発砲した。

放たれた弾丸は、大声を出した男の右の腕へと命中。

続けて放たれた弾丸は、右足、左足両方の太ももへ命中。

たまらず、膝をついた所で、走って来た勢いを乗せた右ストレートがその顔面へ叩き込まれた。

「目標1、沈黙」

誰に伝えるとなく呟いて、次の男へと向かうスタンリー。

その顔面にスピアが突き出された。が、それを半身になってかわし、左足で踏み込みつつ、銃を握った左拳を眉間に突き当てた。

しかし、弾丸は発射されない。

ただ、男は脳震盪を起こし、気絶した。

「強い……！」

大柄なリーダー格の男が小声で叫び、凶暴な笑みを浮かべたのにスタンリーは気づかなかった。

ボウガンを持った男が二段回し蹴りを打ち込んでくる——スタンリーは地面と水平になるほど身体を反らせ、それを避けると、その体勢のまま、ジャケットの内側のホルスターからもう一丁銃を取り出し、男の胸に突きつけた。

『G A N N E R S I N G E L H A N D ・ 4 5』

フォーティファイブ

ガンナー・シングル・ハンド・45。それがその拳銃の名前。

45口径の拳銃。

赤子の時のスタンリーが入れられていた箱に入っていた拳銃であり、弾丸を自動で生成するという特殊な機構を持つ。

これを扱えるのはスタンリーしかない。

この機構は現在の技術では再現不可能であるらしい。

「楽になれ」

その台詞と共に、左手に握られたフォーティファイブが吼えた。

その頃……。

外を包囲する警察官達はこの地区の警察署長の訪問をうけていた。

「状況は？」

警察署長が低い声音で問う。

「現在、軍術学校の青年が1人で戦闘中です。強盗団は3人が沈黙、1人が死亡の恐れあり。栄光ある我々帝国警察が1人の青年に鎮圧を任せるとは……、弱くなったものです」

さきほどスタンリーの相手をした老警官が苦々しげな笑みを浮かべながら答えた。

彼は50歳を超えた大ベテランで、この現場の指揮を執っていた。

「ふむ……。そうか……。君がそう言うのならばそうなのだろうな」警察署長も同じような苦い表情を浮かべた。

そして、後ろに隊員達へ顔を向けた。

「何をしている?!！」

突然警察署長——フランク・ドローウェーは激昂した。

後ろで茫然自失としていた、警察隊員に向かって。

その憤怒の表情を向けて怒った。

「何をしていると言っている! 誇りある我々帝国警察が、たかが5人の強盗団に撃破されたあげく、いくら軍術学校へ通っているとはいえ、まだ希望に満ちあふれた若い一市民を援護もせずたった1人で突入させるとは何事だ! 貴様らそんな事ぐらい上官の命令無くてもやらんか! 愚か者どもが! 己の仕事と正義を果たせッ!」

一同はぽかん、と間抜け面をさらしていたが——真っ先に正気を取り戻したのは荒事に慣れている機動隊の面々だった。

表情が瞬く間に引き締まり、それまで動けずにいた自分達を恥じるように舌打ちをして、次々と突入を敢行した。

機動隊員が突入を始めたその時、スタンリーと最後に残った男は睨み合っていた。

「ふはは……」

男が凶暴に笑う。

対して、スタンリーは無言で立っていた。

「強いな、少年。これでやっと俺は終われる」

男はどこか寂しげな笑みを浮かべていた。

「……」

「おいおい、なにか喋ってくれ」

「1つだけ聞く。ミリはどこだ」

スタンリーは足下でうめく盗賊を冷然と見下ろしながら言った。

「ミリ……？ ああ、あのガキか。奥だ。何も危害は加えていない。

これは約束する」

スタンリーは名誉や金が欲しい訳ではなく、ここを経営している家族と顔見知りであっただけである。

彼はここを経営している夫妻の1人娘、彼に懐いている少女が気にかかり、1人で飛び込んで来たのだ。

「店主と奥さんは……？」

「悪いが……」

男はそう言って隅を顎で示した。

「……！」

スタンリーは声も無く驚く。

ギリリ。歯茎がきしむほどの力で歯を食いしぼる。

胸の奥底から沸き上がる感情は何だ。怒りだ。

ふがない自分への怒り、後悔、憤怒。

——俺はこんな俺を許してはいけない。

彼は怒りに身を任せた。

怒りは興奮へ。

恐怖を握りつぶす活力へ。

腰の長剣を抜き放ち、怒りのままにあり余る力で剣の柄を痛いほど握りしめる。

「おおおおおおおっ！！」

その怒りは抑えきれず、声に表された。
咆哮。

それと共にスタンリーは爆発的に地面を蹴り、駆ける勢いのまま相手の懐に突進した。

「ハアツツ!!」

その突進をニヤリ、と笑いながら見、男は短い気合いと共に青年の頭上に大剣を振り下ろした。

それを転がってかわす青年。

転がって立ち上がったところに二段撃。大振りの薙ぎ払いと、突きのコンビネーション。

薙ぎ払いを身体を沈めてかわした青年は、突きを横に弾いて力のベクトルを横に受け流した。

——このガキ、腕が立つ。

一旦、飛び退いて体勢を立て直し、その青光りする剣をこちらへ向けて構えている青年を男は笑みをたたえて見返した。

普通、中途半端に腕が立つと俺の大剣を受け止めようとするが、このガキは受け流した。まともに受けたら剣がへし折れることに気づいたか。

まったく、初めてだぜ。俺の剣をかわすどころか、その特性まで見抜きやがった。

——訓練、じゃねえな。こいつあ、『実戦経験』がある。

そこまで思考すると男は青年に声をかけた。

「おいガキ！名前は何だ？」

「あんたに教える必要は、ない！」

勇ましいねえ。

まるでそう言うかのように歪められた口は、男が戦場を駆け巡って来た猛者であることを如実に示していた。

スタンリーは飛び上がりながら斬り上げる。

その華麗な斬撃を、男は口笛を吹きながら避ける。

スタンリーは返す手で、跳躍した状態から急速落下し、剣を男の頭

上に叩き付けた。

ガキンッ、と金属音が響き渡る。

「ハッ、いい動きしてるじゃねえか！」

口元に相変わらず笑みを浮かべながら男は挑発した。

「フン、お楽しみはこれからだ」

とスタンリーも笑いながら挑発を返した。

「行くぜ！」

スタンリーが繰り出したのは多彩な斬撃の連続攻撃。グレートソードが取り回しの良くない武器と一瞬で見抜き、強力な斬撃よりもこちらのほうが効果がある、と結論づけた。

長剣の特性を十二分にいかしたコンボ攻撃は次第に男を追いつめていく。

しかし、手首を返す一瞬の隙を突かれ、剣を遠くへと飛ばされてしまった。

「ガキが……。終わりだ」

男は剣を頭上に高く掲げ、スタンリーを兜割りに一刀両断にしようとしている。

「スタンリーお兄ちゃん!!!」

男は驚きの表情をして、奥の部屋に視線を転じる。

「ミリッ!!! 来るな!!!!」

走り寄ろうとした少女に向かって叫ぶスタンリー。

「チィッ」

男は舌打ちをして、剣を振り下ろした——が、弾かれた。一体何が起こった？

咄然とする男を目の前には、硝煙が煙っている銃口。

何が起きたか。

それは、スタンリーが一瞬で腰のホルスターから『ミリタリー&ポリス・マークA』を抜き、剣の軌道に合わせて、撃った。

そのことにより、振り下ろされる剣の力のベクトルは逆へと転換され、弾かれたと言う訳だ。

「ゲームセットだ」

男が聞いたその言葉は、いやにゆっくりと空間に響いた。
ドドドドン！

バックステップと同時にスタンリーは男の四肢へちようど四発の弾丸を撃ち込んだ。

「ぐお……！」

地響きを立てて男が倒れると同時に、少女が飛びついて来た。

「ミリ……！大丈夫だったか！？」

ミリ・ヘクター。

紫の髪を腰まで伸ばした155？ぐらいの小柄な少女。スタンリーよりも2つ年下の15歳。

懐いている、と言うよりは、好意を抱いていると言った方が正しいのだが、スタンリーは自分に対しての好意に全くもって気づかない超弩級の鈍感だ。

彼女からすれば『好き』なので、スキンシップをするのだが、スタンリーからすれば『妙に懐かれている』からスキンシップをされていると思っている。

この認識の相違は直すのに多大な労力が必要だ。

胸下の辺りに飛びついて来た少女の頭を撫でながら彼は言った。

「うん……、ミリは大丈夫、でも、グスッ、お母さんとお父さんが……！うええええん……！」

15歳の子供には辛いだろう。

両親が2人とも殺されたのだから。

その苦しみは言語を絶するものがある。

——俺には両親がいない。だから、この苦しみが分からない。だけど、デイビットが殺されたら、俺も泣くだろう。

彼は心の中でそう思っていた。

スタンリーは捨て子である。その彼を男手1つで17歳まで育て上げたのは教会地区のデイビット神父だった。

教会前に捨てられていた彼を拾い、育てた。

——デイビットにミリのことを頼んでみよう。なんとかしてくれるかもしれない。

そう考え、後は警察に任せて退散しよう、そう思ってミリの手を引き、階段へ向かったところで、男が跳ね起きた。

最初に瓶を投げつけられ、気絶していた男だ。男は腰の剣を抜き放ってこちらに走ってくる。

「ミリ、伏せてろ」

「うん！」

少女を地面に伏せさせると同時に、懐のフォーティファイブを抜き、身を屈めて敵の横薙ぎをかわすと、その顎へ向けて銃のバレルを突き入れる。

それと同時に、フォーティファイブの銃口が火を噴いた。

バン！

一発の銃声と葉莢の転がる音。

男は顎から頭にかけて撃ち抜かれ、即死した。

その動きを見ていた機動隊員が驚愕の表情を浮かべて呟いた。

「G A N Ⅱ F I G H T ……」

『G A N Ⅱ F I G H T』とは、ここ5年ほどで急速に広まった近接戦闘術。

銃の射撃と軍隊格闘を高度に組み合わせた戦闘術。

ゼロ距離での射撃戦や、一対多数の戦いを制するために開発されたと言われている。

機動隊員にとって、今、彼が見せた動きは驚きだった。

機動隊員は、軍術学校の生徒の『G A N Ⅱ F I G H T』がこれほどの技術を持っているとは思っていなかったのだ。

しかし、彼の認識は間違いだった。

外では、スタンリーについてのデータが送られて来ていたが、その一点を見て警察署長たちはあんぐりと口を開けた。

『GAN||FIGHT』の創始者と戦い、勝利した——とそこには書いてあった。

「異常、と呼べるほどの闘争センス」

「あの青年は完璧だ。今の帝国軍人ならば万に一つも勝ち目はない」「彼を鍛えた。彼ならば私を超えることが出来るだろう」

そう、創始者の言葉が述べられていた。

「む……、奴らを取り押さえろ！」

フランク・ドゥウェーはあんぐりと口を開けていた状態から意識を取り戻すように首を振ると、高らかに命令を下した。

入口から青年と少女が出て来た。

それを見て警官達は万歳を叫び出す。

フランクも口に緩やかな弧を描く。

「良くやってくれた。スタンリー君」

フランクは2人に穏やかに声をかけた。

「いえ、それより、ミリを教会へ連れて行ってよろしいでしょうか？」

そのフランクとは対照的にスタンリーの拳は白くなるまでに握りしめられていた。

「それは構わないが……どうかしたのか？」

「いえ、少々自分が許せないだけです」

「……。今、報告を受けたが、彼女の——」

とフランクは青年の横の小柄な少女を見下ろしながら深刻な表情で言った。

「御両親が亡くなったとか。そのことについてだろうか？」

「なぜ……、分かるのです」

「君の表情を見れば分かる。気負わないでくれ。元はといえば我々

の責任だ。……すまなかった」

フランクはミリに向かって深く頭を下げた。

「俺らはもう行きます。署長もお気をつけて」

「うむ、ありがとう」

夕日に照らされて教会へと手をつないで歩く2人をまるで兄妹だ、
と思いつつ、フランクは彼らが教会に消えるまでその背中を見守っ
ていた。

第一話 ― 青年 ― (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回は育ての親と、他のヒロインより一歩進んだ位置にいるヒロインを出します。
それでは。

第二話 ―教会― (前書き)

教会を舞台にラブコメ (なんだそりゃ) が始まります。

第二話 ―教会―

いつのまにか夕方。

兄妹のように寄り添う2人は教会地区へと、燃えるような夕日のなか、歩いていった。

「大丈夫か？」

スタンリーは心配と安堵がないまぜになった表情で、ミリへと声をかける。

「ミリはもう大丈夫だよ。お父さんとお母さんがいなくても、お兄ちゃん達がいるから」

彼女は太陽のような笑顔を浮かべた。

――なんて強い少女だろうか。

スタンリーはそう思った。

――この子の笑顔を曇らせるわけにはいかない。

彼はそう改めて決意した。

「ねえ、お兄ちゃん？ミリはこれからどうすればいいのかな？」

純粹そのものの瞳で聞いてくるミリを見て、スタンリーは思わず目が熱くなった。

なぜか知らないが、とても切なくなった。

凄絶な体験をしてもなお、純粹さを失わなかったその瞳。

まるでこの少女がどこか手の届かないところに行ってしまうのではないか、そのような不安に駆られるほど儚く見えたその瞳。

その力を入れたら、ポキリと折れてしまいそうな線の細い体。

全てが淡い幻想のような、そんな気分させる。

思わずスタンリーは膝をかがめ、ミリを抱きしめていた。

いま、抱きしめなければ彼女は霧の中に消えてしまう――そう、心のどこかで叫んだ自分がいた。

「お兄ちゃん……？」

いぶかしげに見上げて来たミリにその泣きそうな顔を見られたくな

くて、彼はミリの肩に顔をうずめて、震える声で繰り返した。

「ごめん、ミリ、ごめんな……守れなくて、ごめんな……」

ミリは抱きしめられたまま、スタンリーの背中におずおずと手を回した。

「なんでお兄ちゃんが謝るの？お兄ちゃんはミリを助けてくれたんだよ？」

その彼女の優しさが痛かった。その彼女のぬくもりが切なかった。

「ごめん……今だけでいいから……このままにさせてくれ……」

彼はミリを抱きしめたまま静かな嗚咽を漏らした。

それに彼女が気づいていたかどうかは分からない。

しばらくたって……。

「ごめん、情けないところ見せちゃったね。行こうか」

彼の口調は明らかにいつもより優しい。

スタンリーと同年代の少女達と喋るときと比べると、柔らかい。

ミリ専用、というか、対年下用と言うか、包み込むような口調であった。

スタンリーはくしゃりとした、困ったような笑みを浮かべてミリを促した。

「うん！」

ミリは元気よく返事をして、また2人で歩き出す。

50mくらい歩いたところで、スタンリーの体がぐらり、と揺れた。

「む……」

がくつ、と膝を地面につき、荒い息を漏らす。

「お兄ちゃん！？大丈夫！？」

「大丈夫。少し力を使いすぎただけ」

彼はそう言って、ジャケットの前ポケットから『ポーシヨン』を取り出した。

『ポーシヨン』

この世界で流通している体力回復薬の名称。

自分の最大体力の50%を回復することが出来る。

それを一気に飲み干し、「ふう…」と彼は息を吐いた。

「ゴミ箱はどこかなって」

彼は通りを見回し、歩道に設置されていたゴミ箱にポーションのパックを捨て、歩き出した。

2人は教会に着いた。

スタンリーはドアを叩いて呼びかけた。

「デイビット！帰ったよ！」

1分ほどして、神父服を着て、白いひげを顎に蓄えた老人が出て来た。この老人こそ、スタンリーの育ての親、デイビット神父である。その落ち着いた風貌と言動で、地区の人々から慕われている。

若い頃は凄腕の賞金稼ぎだったらしい。
バウンティハンター

「おお、スタンリー。怪我は無いかな？」

「どこも。それよりさ……」

「何も言うな。おまえの言いたいことはわかっている」

デイビット神父はその表情を見て、スタンリーの言いたいことがすぐ分かったようだ。

さすが育ての親である。

「ミリ、良く生きててくれた」

そう言ってデイビット神父はミリを抱きしめた。

行動が似た者親子である。

「ミリ、良かったらだが、この教会でスタンリーと共に暮らさないかな？」

スタンリーが聞きたかったのはまさにこのことだ。

ミリを教会に住まわせてもいいかな？

スタンリーはそれを聞きたかったのだ。

「ミリは大賛成！」

ミリは元気に。

「俺は言うまでもねえよ」

スタンリーは、少し恥ずかしいのだろうか、頬を掻きながらそう言った。

「よし、決まりだな」

デイビット神父は緩やかな微笑みの中で2人の決定を見守った。これから祈りの時間だ。

スタンリーは祈りを終え、新しくミリの部屋になる場所へと向かった。

コンコンッ、と2つノックをしてから入る。

もし、ミリが着替えていたら大変なことになるからだ。

スタンリーには経験がある。

幼なじみと言うべきなのだろうか、彼女は孤児だった自分に差別の視線を向けること無く接してくれた。

彼女のしなやかな裸体を一度見てしまったことがある。

もちろん、悲鳴を上げられた。

「どうぞー」

——ミリじゃない？でもどっかで聞いたことのある声。

そう思考しつつ、ドアを開けた。

「スー君？」

「ブフッ、ごほっ、ごほっ、ごほっ」

スタンリーは——小さく吹き出してから、咽せた。

——俺をスー君と呼ぶヤツは1人しかない。

「やっぱり、スタンリーだあ」

——フェルム・ヴェンジェンス。俺がつけたアイツの愛称はフィー。そこにいたのは、栗色の髪を肩まで伸ばし、同色の大きな瞳をくりくりとさせている美少女。17歳。スタンリーと同年。

「フィー、どうしてここにいる」

吹き出したその表情をなんとか引き締めながらフェルムに問うスタンリー。

「もー、デイビットさんから聞いてないの！？掃除を手伝って、だよ！」

——あんの、馬鹿親父イイイー！ー！！！！

スタンリーは心の中で育ての親を盛大に罵った。

「わりい、聞いてないみたいだ」

「うん、わかったよ」

彼女が、スタンリーに差別の視線を向けずに接してきた初めての人だった。（育ての親のデイビット神父は除く）

そのせいか、それとも彼女の優しい性格のせいか、彼はフェルムに好意ではない、がしかし、明らかに特別な思いを抱いている。

『アイツは俺が守らなきゃいけないヤツなんだ』

彼の脳裏に幼い日の誓いが甦った。

——その誓いは今でも変わらないよ。フェルムの親父さん。

去年亡くなった彼女の父親に心のなかでそう呼びかけた。

『アイツは俺が笑顔にしなきゃいけない女の子なんだ！』

デイビット神父にそう言ったことも甦ってきた。

——懐かしいな。

彼は急に思い出した幼き日の記憶に対し、そう思った。

いつの間にか、彼の顔には微笑が漂っていた。

「もー、スタンリー、聞いている！？」

「聞いているさ」

2人は掃除をしながらたわいもない話で盛り上がった。

——俺にはやはり、フェルムが必要だ。

スタンリーはそう、誓いを新たにした。

その頃……。

デイビット神父はというと。

ミリの部屋のドアに、つまりは今2人がいる部屋のドアに耳をぴっ

たりと付けていた。

何やってんだあんた？

部屋の中からは彼の息子と、娘のように思っている少女。

2人の楽しそうな笑い声がドア一枚を介して聞こえてくる。

彼らの笑い声を聞いて、デビット神父も穏やかに微笑んだ。が、次に呟いた言葉はおよそ聖職者らしくないものだった。

「ここまで、お膳立てしてもくっ付かないか、むう、どうするべきか……」

おい、あんた一体ナニさせるつもりだ。

「しかし、見ててむずがゆくなるな、あの2人は」
スタンリーと、フェルム。

互いが互いをととても大切に思いすぎているせいか、2人の関係は家族のような、友人のような、そして、恋人のような曖昧なもの。

そのため、このドアの向こうに広がっている空間は桃色と言うより、オレンジ色の空間だった。

「むう、いつそ既成事実を作らせてしまうか……？」

おい、あんた本当に聖職者か？

「やっぱり、（諸事情によりこの文章は削除されました）なことをさせるしかないか」

と、難しい顔でぶつぶつ変なことを口走るデビット神父。

ここが教会じゃなかったらあんたただの変質以下略。

「じゃあ、そろそろお店の時間だからわたしは行く、だよ？ 鍵は閉めておいてねー」

花が咲いたような笑顔で頼み込まれたスタンリー。

「たくっ……」

スタンリーは呆れたような言葉を吐いたが、彼の顔は優しい笑みに彩られていた。

フェルムの満面の笑みでの『お願い』を彼は断れる訳が無い。

フェルムはメアリーと言うウェイトレスと共に喫茶店を営んでいる。

父親の形見の喫茶店を譲り受けた形で出している。

ゆえに、経営者兼厨房担当兼給仕という、なにげに凄い女の子。スタンリーはその喫茶店『キャンディ』でいつも朝食を食べる。

昼はフェルム特製の愛情弁当（↑ってオイ）を食べている。

夜は彼女が教会に来て手料理をふるまったり、デイビット神父がつくったり、スタンリー本人が作ったり、たまにだが、ミリが作りに来たり。

ミリはああ見えて料理が上手く、プロ級なのだ。

ミリに『キャンディ』でお手伝いしてみたら、と進めようと思っ
ているスタンリーだった。

「どうしようか……？」

誰に聞くとも無く呟いた。

「寝るか」

ってオイ。そこミリのベットじゃないのか？

「……」

寝てやがる。

では皆さん、ごきげんよう（↑おまえ誰だよ）

第二話 ―教会― (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回は喫茶店『キャンディ』の話が主になります。
それでは。

第三話 ―喫茶店―（前書き）

今回はスタンリーが少々不憫な目にあっています。

第三話 ―喫茶店―

夜になった。

スタンリーはミリと共に、教会の向かい側、喫茶店『キャンディ』へ向かう。

『キャンディ』の中はいつも、柔らかな雰囲気漂っているのだが、今日は違った。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

見るからに軽そうな男2人が、ウェイトレスの服装――黒いロングスカートに白いブラウス、白いエプロンに同色のヘッドドレス、という格好をしたフェルムの腕を掴み、ナンパしていた。

かなり強い力で掴んでいるのか、彼女の顔が痛みに歪んでいる。

「え、いや、あの仕事があるんで……ちよつと困るかなー？」

「じゃあ、仕事が終わった後でいいから」

「え……いや、っその」

「じゃ、待ってるよ」

――アイツが痛がってんじゃねえか。ブッコロス……！

ミリは壮絶にイヤな予感がして、彼を振り仰いだが、時すでに遅し。

「ミリ、ここで待ってろ」

そこにいたのは、ブチ切れすぎてなにかのメーターが振り切れたスタンリー。

怒れば怒るほど熱くなるはずの彼が笑う、これほど怖いことがあるのだろうか。

口元は綺麗な三日月を描いているのに、目は全く笑っていない。

ここに良く来て、フェルムとスタンリーの関係――家族のような、友人のような、そして恋人のような。

その曖昧な関係を知っている常連客は震え上がった。

「ねえ、お兄さん達……」

「あん！？何だテメエ！」

スタンリーは氷のような笑顔のまま、その肩をガシツ、と掴み、言った。

「ちょっとオモテ出ようか？」

なぜ、表がオモテなのかはだれにもわからない。

「吠えてんじゃねえぞガ……」

バキツ。

チンピラがその言葉を言う前に拳が突き出され、そいつは、鼻から盛大に血を噴き出しながら倒れた。

「テメエなにしゃが——ぶべらちっ」

またも言葉を言い終わる前に、今度は上段蹴りがもう一方の男に命中した。

スタンリーは2人の首根っこを掴み、ドアを足で蹴り開けて、表に出て行った。

（ただいま、とても凄惨な光景が続いております。しばらくお待ちください）

「これで良しっ」と

15分ほど時間が過ぎた後、いつもの状態のスタンリーが戻って来た。

「お、お兄ちゃん、だいじょうぶなの？」

「ん？ああ、問題ないよ」

いつもの穏やかな笑顔で答えるスタンリー。

「スー君、ありがと！」

とフェルムは彼の頬にk i s s ☆

おおおっつっ。

と『キャンディ』の常連客はどよめく。

「う…？」

ナニ、じゃなかった、何されたのか自覚していないのか、スタンリー。

「ちょっと、疲れた。俺寝る」

いやちよつと待て。

お前ここに来るまでも寝てただろ！

「じゃあ、向こうで食べる？」

と、フェルムが指をさしたのは、奥のVIPルーム（実際はスタンリー専用）。

「おう。そうする」

「分かった。料理はいつものでいい？」

「俺はね。ミリはなにが食べたい？」

ちなみにいつもの、とはオニオングラタンスープと、ソフトフランクパン。そして、ミートローフ。

スタンリーはオニオングラタンスープが季節を通して大好物なのだ。

「え？ミ、ミリも？」

今まで、スタンリーと話せなくて頬を膨らませていたミリは、いきなり声をかけられ、おどおどわたわたしている。

彼女の微笑ましさに常連客も、2人の少年少女も頬を緩めた。

「ミリは、うーんと、スパゲッティ？カルボナーラ？にする」

「了解だよー。少し待っててね」

フェルムが厨房に消えると同時にスタンリーとミリも奥の部屋へ消えた。

数分待つと、料理が運ばれて来た。

こんがりと焼けたチーズが食欲をそそるオニオングラタンスープ。ふんわりしっとり柔らかなソフトフランクパン。

どっしりとしたミートローフ。

「うん、おいしそう。いただきます」

黄金色に輝くカルボナーラ。

「いただきます！」

「召し上がれー！」

スタンリーはゆっくりと食べていく。

ミリをそれに合わせゆっくりと食べる。

フェルム自身も、肉団子スープとピラフを食べる。

「そういえば――」

ドアの向こうから3人の少年少女の明るい話し声が聞こえてくる。

その楽しそうな声を聞いて、皆初老に手が届きそうな常連客達は優しく目を細める。

「若いっていいねえ」

どっぷりと太った、しかし優しそうな婦人が言う。

「そうだねえ」

常連客達も、昔を思い返しているのだろうか、少し遠くを見つめていた。

「昔はあんなにちっちゃかったのになあ」

「ほんと、いつの間にか大きくなったわよね」

彼らはスタンリーに差別を向けず、『孤児』ではなく、『皆の子供』として、扱っていた。

その心が届いたのだろうか。

幼い頃のスタンリーのような、デイビット神父とフェルム以外全てを憎悪するような視線は無くなった。

しかし、今でも昔の面影は残っているようで、偏見を持った大人や同年代の少年達に向ける中傷に対してはその視線が復活する。

しかも、その視線は何倍もの鋭さを持って突き刺さってくる。

さながらそれは鋭すぎて触れたら怪我をする氷柱のような、そんな視線だ。

昔のような狂気は今でも彼の中にくすぶっているのではないだろうか。

昔より遥かに濃密さを増して。

それが彼らの心配材料だった。

少し前。この喫茶店に若い帝国軍人が訪れた。

スタンリーの食事の世話しているところだったフェルムを侮辱し、スタンリー本人を侮辱し、あろうことかデイビット神父までも侮辱した。

スタンリー本人への侮辱はともかく、家族の2人を侮辱されてスタンリーが黙っている訳がない。

修羅のような勢いで若い帝国軍人の手足を斬り落とした。

そのときの彼の瞳は明らかな狂気に染まっていた。

なぜ常連客達はそう思ったのか。

それは彼の瞳がいつものように黒色ではなかったためだ。

彼の瞳は違う色に変化していた。

彼の瞳は——紅い目^{レッドアイ}だったのだ。

常連客達はデイビット神父に問いただしたが、彼は言葉を濁すだけで、何も教えてはくれなかった。

しかし、今の彼にそんな雰囲気は全く感じられない。守ると決めた少女達と楽しそうに談笑しているだけだ。

常連客達は彼の誓いを知っているが故に、なおさら優しい瞳でかれを見るのだ。

カランカラン、鈴が鳴った。

「やあ、皆か」

入って来たのはデイビット神父。

「やあ、こんばんは！」

「こんばんは、デイビット神父。壮健そうで何よりです」

その言葉に軽く手を挙げて応えるデイビット神父。

彼が教会地区でどれだけ慕われているか分かると言うものだ。

「スタンリー達は？」

デイビット神父はなぜか楽しそうな表情で聞いた。

「奥の部屋よ、デイビットさん」

どっぴりと太った婦人が言った。

「む……、それでは邪魔するわけにはいかんな……」

デイビット神父が悪戯な笑みを浮かべていったその言葉に常連客達は大爆笑した。

彼らはデイビット神父の企みを知っている。

すなわち『フェルムの思いに報いてあげよう作戦』だ。――まあ、苦情は後で受け付けよう。

その爆笑で誰か新しい客が来たのか、と気づいたフェルムが慌ただしく出てくる。

まるで護衛のように部屋からスタンリーも滑り出して来たが。

「デイビット!？」

スタンリーは驚いていた。

『教会の用事があるから、帰りは遅くなる』

と言って出て行ったはずのデイビット神父。

まさか夜ご飯のうちに帰ってくるとは予想もしていなかったのだ。

「速いなら速いって連絡してくれればいいのに」

スタンリーは拗ねたような表情をする。

いつも大人っぽいぶん、彼がたまに見せるこうした仕草は、彼をまだ17歳の少年だと示していた。

それに気づいたデイビット神父はますます笑みを深くして喋る。

「ん? 何をするつもりだったんだ? フェルムでも連れ込む気だったのか?」

「なっ!？」

スタンリーは顔を真っ赤にする。

助け舟でも出してもらうかと、彼が横を向くとフェルムが「はうう……」と言って真っ赤になっていた。あ、湯気まで出ていた。

「そ、そ、そんなわけないだろうっ!」

なんとかして絞り出した言葉はめちゃくちゃにどもっていた。

「じゃあ何だ? ミリを抱き枕にするつもりだったのか?」

そう、彼がミリのベットで仮眠をとっていた時、その真横にミリが入ってきて一緒に寝ていたのだ。

小さいくせして、なかなか大胆なことをする少女である。

デイビット神父は、彼はその時寝ぼけていた、という大事なところは言わなかった。（↑そこが一番大事だろっ！）

ちなみにミリはスタンリーより早く起きて、腕の拘束からなんとか脱出していた。

「………、あー！もう！」

スタンリーは頭を抱えた。

——この馬鹿親父イイイ！！

ついでに心の中で罵っておいた。

「ふふ、冗談だ」

デイビット神父のその言葉を聞いて、からかわれたと気づいて凍結したスタンリーが解凍されたのは5分後である。

解凍方法はミリのチョップ、その名も『ミリチョーローップ』だった。

「私には、モーゴレムのカツレツのAセットを頼む」

デイビット神父は凍結させた自分の息子を尻目にゆうゆうと注文していた——自分の息子の名前で。

何とずる賢い聖職者なのだろうか。

「わかりました、だよ。少しお待ちください」

ちなみにモーゴレムとはビーストの一種で、かなりおとなしい性格。その肉と乳は美味なため、家畜で飼われたりしている。

一言で言うなら乳牛と肉牛を足して二で割った感じのビースト。

捕獲も簡単で、こちらが攻撃を仕掛けなければ攻撃をしてこないというほど、凶暴が代名詞なビーストではおとなしい種。

「いただきます」

デイビット神父は優雅な動作でカツレツを食べ始めた。

その間にスタンリーと美少女2人は奥の部屋へと戻っている。

スタンリーはこれから寝るのだが、フェルムと一緒にいるとちよっ

としたイベントが起きる。

彼らの関係性と、フェルムの服装。

すなわち、膝枕だ。

フェルムはスタンリーを膝枕すると、状況にもよるが、必ずと言ってもいいほど歌を歌う。

それは、この大陸では有名な子守唄だった――。

第三話 ―喫茶店―（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は『子守唄』についての話です。
それでは。

第四話　―勇者への子守唄（ララバイ）―（前書き）

今回は伏線の登場を何ヶ所か暗示しています。
それを探してみてください。

第四話 ―勇者への子守唄（ララバイ）―

場所は奥のVIPルーム。

そこでは、スタンリーがフェルムに膝枕されていた。

ちなみに、ミリは常連客に呼び出され話し相手をしている。

「悪い、しばらく寝かせてくれ」

スタンリーは、その言葉を最後に轟沈。

その寝顔を優しい笑顔で見つめ、髪を梳いた後、フェルムは透き通るような声で唄い始めた。

『私の勇者よ、空を見上げよ、星々は唄うよ、眠れ眠れ、静かに♪』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて♪』

『私の勇者よ、闇の中を照らせよ、そこには、幾千の時の声♪』

『その歌は、光の中に、眠れ眠れ、と響く♪』

『永久とこしえの中で、宿命を忘れて♪』

『今だけ、目を閉じて、私に身を任せて♪』

『私の勇者よ、必ず私に、ただいま、と♪』

その美しい歌声は常連客達にも聞こえていた。

『勇者への子守唄ララバイ……』

誰か1人がそう呟いた。

「私も良く唄ったものだ……」

デイビット神父が懐かしむように天井を見上げる。

「え？デイビットさんがですか？」

太った婦人が驚いたように聞く。

「うむ。スタンリーが小さい頃にな、寝れない時にはいつも唄ってやっていたんだ」

『彷徨い果てて、私の横に倒れ込む♪』

『そんな君が、愛しくて♪』

『崖っぷちでもいい、君を愛してる♪』

『君のために、祈り捧ぐよ、君を愛してる♪』

『星々の導きで、出会えたのだから♪』

『君の帰る場所はここだから♪』

『ずっと、ずっと、待っているよ♪』

「あれ？2番になると『私の勇者』から、『君』に変わってる？」
常連客の1人が不思議そうな顔で呟いた。

それに答えるように、デイビット神父が語った。

「この子守唄の起源はとても古い。大陸神話に出てくる勇者の物語の頃からだ。大陸神話が成立したのが約1000年前と言われている」

「へえ」

「大陸神話では、寝ている勇者をシスターが膝枕して唄ったのが最初と言われている。その後、2人は愛し合うようになった、と伝えられている。2番の歌詞は魔王を討伐しにいく勇者が、疲れきって、しかし、シスターの祈りでまた立ち上がり、それを見送るシスターを表しているのだ」

「なるほど」

常連客は皆、感心したように頷く。

1人が奥の部屋を覗いた。

そこでは、フェルムが唄いながら、スタンリーの頭を撫でていた。彼女は微笑み、そっとドアを閉めた。

「気持ち良さそうに寝てますよ、スタンリー君。まるで子供みたいです」

「まだあの子は子供だろうに」
デイビット神父は訝しげに言う。

「違いますよ。まるで、小さい子供みたいな寝顔なんです」

「あの子にとっては、フェルムの膝が一番の枕だからな……」
呆れたような、優しいような、判別のできない微妙な表情を浮かべるデイビット神父。

「そうですよねえ。もう、いいかげん、付き合っちゃえばいいのに」

太った婦人がそう言うのと、その場にいた全員が「うんうん」と言わんばかりに頷いた。

ちなみにミリはというと、一瞬にして2人を覆った、オレンジ色の空気に取り残され、ふてくされていた。

2人の出す空気は、バカッパルのようなピンク色の空気ではなく、名をつけるならば、サワヤカッパルと言うべきだろうか。

この地区に子供は少ない。まあ、若い夫婦もいるし、教会内に孤児院もあるのだが、大体が初老をすぎた男女や、退役軍人だ。

もっとも、退役軍人はスタンリーを嫌って出て行ってしまったが。

その空き家には、『キャンディ』の常連客達の知り合いが次々と引っ越してくる。

その知り合い達は、別にスタンリーを嫌うような人間達ではない。むしろ、スタンリーとフェルムを微笑ましく見守るような、そんなあたたかな人達だ。

この地区は帝国の首都の地区というよりは、教会を中心にした1つの国と言うべきだろう。

また、スタンリー本人も、フェルムや教会の子供達を守るために、この地区唯一の賞金稼バウンティハンターぎとして、活躍していた。

凶暴なビーストには、一体につき〇〇ゴールドと、賞金がかけられる。

この世界の通貨はゴールドと呼ばれている。記号はGだ。

そして、一種類のビーストを一定数討伐すると、『ハンターポイント』というものが与えられ、『ランキング』が上昇する。

この『ランキング』は、今までに稼いだ『ハンターポイント』の総数で決められる。

スタンリーの場合は、稼いだ賞金額はまあそこそ高いが、『ハンターポイント』は今2500ポイントぐらいしかたまっていない。なぜかと言うと、スタンリーに入ってくる討伐依頼は、同じビーストを駆逐することが多いからだ。

しかも、ビーストとしての強さは最低ランクの依頼ばかりである。例えば、逃げ出してしまったモーグリムの排除、同じく家畜のポークリム——大きな豚のようなビーストの暴走を止める、野生化したコケツクー、つまり鶏を巨大化させてダチョウと2で割ったようなビーストの討伐。

ちなみに、モーグリムは牛、ポークリムは豚、コケツクーは鶏と表記する。

たまに出現する凶暴なビースト——リーフライ、ビーストタートル、ボーンビーストなどとランクの最低クラス——を始末するぐらい。それでは『ランキング』が上昇しないのもしかたないだろう。

——フェルム達とこの地区を守るだけでいい。
このときの彼はそう思っていた。

しかし、運命は彼を放っておかなかった。

その呼び声はすぐ側に迫っていた。

1週間後、スタンリー達軍術学校の4年生達は、一度軍属を離れ、実戦経験と言う名の旅へと放り込まれる。

この旅で命を落とす者もいる。

ちなみに、その旅路で仲間になった者は、帝国に居住権が与えられると言らしい。

しかし、彼はまだ知らなかった。

この旅から、彼自身の秘密が明かされていくことを。

彼はまだ知らなかった。

自分がどんな運命を背負っているのかも。

彼の始まりが告げられる旅まで後一週間。

運命を告げる鐘の音は彼に着実に近づいて来ていた――。

第四話 ―勇者への子守唄（ララバイ）―（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回はたびたび物語中にでてきている、『帝国軍術学校』でのコマです。

それでは。

第五話 ―過去?― (前書き)

予定していた軍術学校の話まで進みませんでした。
目測を誤りました。

ごめんなさい。

今回はスタンリーの過去が1つ明かされます。

彼は一体どんな宿命を背負っているのでしょうか。

第五話 ―過去?―

小鳥のさえずりが聞こえる。

少し開けられたカーテンから日の光が差し込む。

スタンリーの顔を日光が直撃し、彼は顔をしかめながら伸びをする。
「ううーん」

横で誰かが寝返りを打った。

スタンリーは起こさないように慎重に掛け布団を少しだけ剥ぎ、その誰かを確認する。

その『誰か』は、フェルムだった。

しかも、寝間着はワイシャツ1枚というラフな格好。

ボタンの上の3つが止められていないため、彼女の肌があらわになりそうになる。

スタンリーは自然とその胸元に視線が行ってしまう。

「つつ……」

自分の思考に気づいた彼は小さく舌打ちすると、自らの本能の叫びを押さえつけ、布を引き裂くがごとく目線を引き剥がし、体を軋ませながら、フェルムに背中を向けて息を整え、壁にかけてあったロングソードを手にとると、教会の庭へと出て行った。

そう言う状況にあっても、手を出さない男のことを紳士と言い、一方ではヘタレと言う。

教会内の庭の立木。

それには無数の傷がついている。

猫が爪研ぎをした訳でも、鹿が角を打ち当てたわけでもない。

そこにあつたのは無数の刀傷。

この教会で剣を使うのはスタンリーのみ。

この立木はスタンリーの訓練の相手だった。

およそ10年前、この地区には1人の退役軍人がよく来ていた。彼はデイビット神父とは旧知の間柄らしく、名前で呼ぶほどに親しい友人だった。

まあ、デイビット神父のほうが、彼より一回り年上なのだが。彼は、退役軍人には珍しく、幼いスタンリーをかわいがった。

何時の日かは定かではない。

幼いスタンリーが木の枝で遊んでいるのを見、彼は驚きの表情を浮かべた。

彼は、横にいて、スタンリーを見守っているデイビット神父に訴えた。

「孤児は全部預けた。お前はそう言ったろう、デイビット！」彼の怒りの声に対し、デイビット神父は緩く首を横に振った。

「あの子は、孤児ではないのだ」

「何だと……！？どういう意味だ」

「詳しくは言えん。だが、あの男の友人のお前なら察することができるやもしれんな……」

「まさか、あの少年は……、『あの男』の息子なのか？」
「……………」

沈黙したデイビット神父に対し、彼はスタンリーを観察した。

スタンリーが拙い回転斬りを見せた時に一瞬見えた紅い瞳に彼の眼は釘付けになった。

「彼の眼の色は、赤い。どういうことだ？」

誰に問うとも無く独り言を言って、彼はしばらく考え込んでいたが、何かに合点したのか、「まさか……」の一言の後、顔面を蒼白にして、デイビット神父に問いかけた。

「まさかあの少年は、『アレ』なのか……！？」

それに対してデイビット神父は厳しい表情で頷き、続けた。

「あの子の戦闘センス、いや闘争本能というべきか……、違うな……闘争センスと言うべきだな……は異常だ」

後に『ガンⅡファイト』の創始者にも見抜けられることになる、異常^{アブノーマル}。それをすでに、デイビット神父は見抜いていた。

「なぜ分かる……？」

「この前、暴走したコケツクーを、たまたま持っていた木の枝一本で殺したのだ」

「なっ!?!?!」

彼はあまりの驚愕に眼と口を見開いた。わずか7歳の少年が暴走したビーストを武器も無しに殺した。それは、異常な闘争センスを持つてさえ、有り余るほどに奇怪なことだ。

「どうやって殺した？」

「木の枝の尖った部分をコケツクーの眼から脳へと貫き通した。それだけだ」

「……」

彼は無言で考え込んでいた。

この事はもはや、異常ではない。一人いれば戦場の劣勢を覆すレベルのものだ。圧倒性^{ノットイコール}。そこまで彼の思考は迫り着いた。

この時、彼は自分もその、圧倒性を持つていることを皮肉にも忘れていたが。

「ぬう……」

彼は唸り、空を睨んで考え事をしていたが、スタンリーが遊んでいる庭へと出て行った。

「スタンリー。剣に興味があるのか？」

木の枝を振り回すのに夢中になっていたスタンリーは急に声をかけられ、びくつ、と震えた。

スタンリーが恐る恐る顔を上げると、そこには雲をつくような大男が。

まあ、小さい頃の話だ。

実際には、その男は帝国軍人の平均身長＋10？ぐらいの身長だったのだが。

スタンリーは知らない男——しかも退役軍人の服装をしていた——を見ると、その目に凄まじい憎悪が灯った。

そのどす黒い眼の色は、歴戦の勇士であったその男さえも一歩後ずさるしかなかったものであった。

まるでこの世のすべてを憎悪するような視線。

彼はその視線に耐えながら、口を開いた。

「まあ、そう警戒するな。俺はデイビット神父の知り合いだ」

その口からデイビット神父の名前が出ると、幼いスタンリーは少し警戒の色を緩めたようだったが、まだこちらに近づこうともしなかった。

幼い子供にはあるはずのない、過剰な警戒心。

それをもたらしただけは何なのか、と考えつつも、スタンリーが近づこうとしないので、こちらから近寄り、頭を撫でようと手を伸ばした——そこでスタンリーの体はギュツ、と硬直した。

口は一文字に結ばれ、まるで痛みに耐えているような表情。

その表情に彼は絶句すると、少し離れ、スタンリーの体を見回した。よく見ると、スタンリーの体には薄い牡丹の花のようなものがいくつもあった。

——殴られた痣……か。

帝国には、『孤児は災いの元』として嫌う、彼にとっては忌むべき習慣がある。

——生まれて来た子供に罪は無い。

彼はそう思っていた。

故に、この地区に来た時、孤児院を開設したのだ。

彼はもう一度スタンリーに近づき、頭を撫でた。

スタンリーはきょとんとして、彼を見上げた。

「俺は、スタンリーの味方だぞ？」

笑みを浮かべながらそう言ってやると、やっとスタンリーは無邪気

な笑みを返した。

彼は立木にスタンリーを向かわせ、後ろから手を添えてやりながら、剣を指導した。

指導しながら、彼は見守っているデイビット神父に、親指を立てた。デイビット神父は苦笑し、親指を立てると、教会の礼拝堂へと、戻っていった。

幼いスタンリーと彼の稽古は日が落ちるまで続いた。

その日の夜。

デイビット神父の部屋で、男2人は話し込んでいた。

「驚いたぞ、カルシウス。君があんなことをするなんてな」
「必要な気がした……、それだけだ」

その言葉を最後に、男2人は黙って酒を酌み交わし続けた。

カルシウスと呼ばれた男、この男がもし、教会から出て、セントラルストリートを歩いていたのならば、通行人はどよめき、窓から男達が顔を出すだろう。

この男は、『騎士団総団長』カルシウス・シグマー。後に、『戦士王』と呼ばれる男だ。帝国軍のすべてを統括する男でもある。ようは、帝国軍の最高司令官だ。

彼を凌ぐ命令権を持つものは、この国の長、すなわち、皇帝その人しかないのだ。

彼は、別に退役軍人でもなんでもない。

今もって現役だ。

お忍びでここに来て、開設した孤児院の子供達の笑顔を見るのが、楽しみだからだ。

そこに、弟子の指導も加わった。

彼の口はいつの間にか、笑みを形作っていた。

ちなみに、現在、カルシウスに剣の腕で勝てるものは帝国内ではない。引き分けるのは1人。今カルシウスの目の前にいる男。

すなわち、デイビット神父だ。若い頃の凄腕の賞金稼ぎの剣の腕は今もって衰えていない。

勝てそうなのは、『伝説』と謳われ、『ランキング』でトップに立つ、2人の男の『共通の友人』。

そして今、逸材が1人見つかった。

彼を超えていく若い力を1つ見つけた。

その結論に同時に至った2人は、不意に大笑いした。

カルシウスは、1週間に1回、稽古に来るようになった。

めきめきと腕を伸ばして来る幼いスタンリーを2人は笑みをたたえて見守っていた――。

第五話 ―過去?― (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回こそは軍術学校の話にしたいと思います。
（予定）
それでは。

第六話 ―戦女神（ブリュンヒルデ）―（前書き）

かなり長くなりました。

3人目のヒロイン登場です。

しかし、主人公と共に旅はしません。

第六話 ―戦女神（ブリュンヒルデ）―

立木に斬り込んでいく。

上段からの斬り下ろし。

袈裟斬り。

払い斬り。

斬撃から刺突へ、刺突から斬撃へ。

教えられた動きに自分で考えた動きを組み合わせながら立木に向かって剣を振るう。

右からの踏み込み。

左からの踏み込み。

バックステップから素早く踏み込み、大振りの一撃。

胸元に剣を構え、剣先を立木に向ける。

突進片手平突き。

敵に高速で突進し、放つ強力な突き。

スタンリーの得意技の1つだ。スタンリーはその突進力を利用した高速移動で無数の突きを放ったあと、フィニッシュで強力な突きを打ち込んだ。立木が挟れる。

スタンリーはジャンプし、素早い3連斬り。

その後、空中に跳躍した状態のまま、縦回転斬り×3。

その反動で少し空中に浮き上がると、スタンリーは空中から地面に急速に落下し、剣を叩き付けた。

この1日前、強盗団のリーダーと戦ったときは両手で叩き付けたが、今やった技は片手である。

スタンリーは立木から距離を取ると、腰を沈めた。

その直後、轟音と共に立木が揺れた。

突進片手斬り払い。

これもスタンリーの得意技の1つだ。

強烈な突進から繰り出す斬り払い攻撃。

高速の突進から繰り出す強力な突き。

そしてそこから派生する無数の連続突き。

そのどれもが大陸剣術には存在していないものである。

スタンリー本人が、剣の師匠であるシグマーに勝つために編み出した剣の技だ。

もちろん、動きの基礎はシグマーから習ったものだが、スタンリーの剣術はシグマーのそれとは全く持って似ていなかった。

『剣の動きというのはその人々の性格や個性が反映される、故に基礎は同じでも、1人1人の剣は全く違うのだ』

これがシグマーの持論であった。

スタンリーの場合は、左右からのステップ（踏み込みとも言う）から繰り出される連続攻撃を出していたかと思えば、

敵を空中に打ち上げる強力な斬撃を放ち、空中で剣を振り回したかと思ったとたん、地面に剣を叩き付けるなど、変幻自在に技を繰り出す。

少し距離が開いていると、強力無比な突進技が襲ってくる、など剣を使うからと言って油断できる相手ではない。

さらには、『GAN||FIGHT』も創始者を超える強さで習得している。

しかも、彼には自分の中で一番強い、と自負している斬撃がある。地面と水平にした剣を腰へ持って来て、剣先は己が背へと導く。腰をすこしだけひねる。

右手一本で柄を持ち、左手は鐔へ軽く添える。

俗にいう居合の構えだ。

東方の島国から伝わった一撃必殺の斬撃。

しかし、東方の島国の剣は反りがあるのに対して、大陸の剣には反りがない。

本場のように、鞘から抜き打ちにバツサリ、というわけにはいかない。

だから、自らの体を鞘に見立て、精魂を込めて一撃。

立木はひとときわ高く音を響かせて、近くにいた鳥がそれに驚いて飛び立った。

スタンリーは持って来ていたタオルで汗を拭う。

もう季節は七月だ。

この庭に来たときのような早朝はまだ涼しいが、訓練を続け、太陽が昇ってくると、教会内の庭はムンとした熱気に包まれる。

体を鍛えるのは気持ちがいいが、この暑さはどうにかならないのか。そう思考しつつ、シャワールームへ足を向けた。

途中、礼拝に来た老婆に声をかけられた。

「こんな暑いのに稽古かい。精が出るねえ」

スタンリーは会釈しながら差し障りの無いように答える。

「はい。ありがとうございます」

スタンリーと老婆はすれ違ったが、去るスタンリーの背中へおばあさんの声が追ってくる。

「水分補給をちゃんとするんだよ」

スタンリーは振り返らず、「はい」と答えて、小走りでシャワールームへと急ぐ。

スタンリーはまた、老爺とすれ違い、如才なく会釈をするが、老爺はスタンリーを存在しない、と言わんばかりに無視をした。

彼は目の前の老爺を殴り飛ばしたい衝動に駆られるが、それをなんとか堪えて、さらに速度を上げる。

スタンリーは熱いシャワーで汗を流してから、男物の香水をつけ、下着を着て自分の部屋へと戻った。

彼は黒いバトルスーツの上下に身を包み、その上からジャケットを着る。

なぜこのクソ暑い夏にジャケットを着ているのかと言うと、そのジ

ジャケットは彼のトレードマークだからだ。

ジャケットの背中には、狼の横顔が縫い込んである。

デイビット神父曰く、赤子のスタンリーを狼が見つけたとかなんとか。

そのため、彼のトレードマークとして、狼が選ばれたのだ。

彼は教会の祈りを終えてから、喫茶店『キャンディ』へ向かった。

「おはよう、スー君」

フェルムが満面の笑みでスタンリーに声をかける。

「おはよう、フィー」

スタンリーも穏やかな表情で声を返す。

相変わらず2人の世界を作るのが速い。

それを見ていた常連客達は猛烈な背中のかゆみに襲われた。

『早くあの2人がくっ付けばいいのに』

あまりの2人のむずがゆさに背中のかゆみが出て来たのだ。

「おはよう。お兄ちゃん」

少し眠そうな顔で厨房から出て来たのはミリ・ヘクター。

彼女に対し、スタンリーは驚いた表情で言った。

「なんでミリがここに？」

「ミリはお姉ちゃんの喫茶店を手伝うことにしたの」

とミリは言っただけでまた厨房に引っ込んだ。

スタンリーは疑問符を頭に浮かべたままだったが、どうにか自分を納得させる。

「おはようございます。スタンリー」

「どわあ!？」

スタンリーは後ろから声をかけられ、飛び上がった。

「ふふ、私です」

そこには、豪奢な金八、じゃなかった豪奢な金髪の髪をロングにした女性が悪戯な笑みを浮かべて立っていた。

「メアリーさんか！あー、驚いた」

スタンリーは顔見知りだと分かれると、一気に体の力を抜いた。

彼女はここで働いているウェイトレスなのだ。歳は19歳。ちなみにフラグは立っていない。

幼い頃に植えつけた警戒心はなかなか通常には戻せないものだ。

「メアリー、なにやってるの！？手伝って、だよ」

「ごめんなさい、呼ばれているみたいです。あなたのお姫様に」

「だ、誰がお姫様だっ！あいつは、別に…その、ああ、もう！」

スタンリーは顔を真っ赤にして反論しようとするが、結局音に乗せられて言葉となることは無かった。

その自分に焦れて頭を抱えるスタンリー。

それを悪戯な笑みで見るメアリー。

戦闘では強くても、女性には優しい紳士な性格が災いしたのか、スタンリーはメアリーには頭が上がらないのだ。

しかし、スタンリーはフェルムや軍術学校の女性達のことについて相談するのはデイビット神父ではなく、このメアリー女史なのだ。

いつもはスタンリーをからかったり、そのスタイルの良い体でスタンリーを真っ赤にさせたりと、悪戯を繰り返す彼女だが、真面目な場面では頼りになる。

まさに、近所の頼れるお姉さんのような感じの女性だ。

それに対して、スタンリーは振り回される弟という感じだろうか。

フェルムとスタンリーとは違うが、微笑ましさを感じさせる関係だ。

「メアリー、早く来てよー」

フェルムの声がまた聞こえる。

「ちょっと待っててー。今注文取るからー」

「はい」

しばし奥に向かって話した後、メアリーはスタンリーに向き直った。

「ご注文は、ヒーローさん？」

もちろん、悪戯な笑みを浮かべたままで。

「あんたは普通に人の名前を呼べないのか！？」

スタンリーは突進して来る猪もかくやという勢いでツツコミを入れた。

「えー、だって、スタンリーはフェルムがピンチのときは必ずと言っていいほど出現するじゃん」

「そうですか？」

「自覚してないのかしら……？」

メアリーは額に手を当て、ゆるゆると首を横に振った。

「まあ、いいわ。ご注文は？」

「マフィンのAセットで」

「はい、注文はいりまーす、マフィンのAセットです」

メアリーは厨房に向かって叫ぶと他の常連客の元へ注文を取りにいった。

数分後、朝食が運ばれて来た。

焼きたてで湯気を上げているマフィン。

カリカリに焼かれたベーコンと半熟卵。

コーンの冷製スープ。

以上がAセット。

「いただきます」

「召し上がれ、だよ」

もちろん、朝食を運んで来たのはフェルム。

朝食を食べるスタンリーの顔をずーっと見つめている。

スタンリーが視線を感じて顔を上げると、また眼をそらす、ようなことを、何度も何度もやっていた。

ちなみに、フェルムの顔は赤い。

それに気づいたスタンリーは声をかけた。

「オイ、どうした？」

「ひゃい!？」

フェルムは奇声を上げて椅子を倒した。

「い、いやその、ただ、男の子だなーって思って……」

テンパリながらもなんとか絞り出したその声は小さかった。

「は？」

それをなんとか聞き取ったスタンリーも彼女の発言の意図が分からず、首を傾げていた。

「だから……うう、か、かっこいいなって！」

フェルムが真っ赤になりながら言った。

「そ、そうか、あ、ありがとう……」

美少女に『かっこいい』と言われて喜ばない男はいない。

スタンリーも顔をトマトのように真っ赤にして礼を言った。

なぜ彼女がこんなにもテンパっているのか。

それは朝にさかのぼる。

朝、スタンリーが日課の訓練に行つてしばらくたつたあと、フェルムは寝ぼけまなこで眼を覚ました。

天井がいつもと違うことに気がつき、訝しげに体を起こす。

そのとき、布団に男物の香水の匂いを感じた——つまりはスタンリーの匂いを感じてフェルムは飛び起きた。

「うわわ！？？わたし、どうしてここに！？」

彼女は教会内の部屋で寝ていたのだが、なぜか寂しくなり、スタンリーの部屋に寝にいったことは現時点では覚えていなかった。

「やば、うわー！こんな格好でスー君の横にいたなんてー！？どうにかなっちゃうよー！！」

心臓が凄まじい速さで鼓動を続けている。

それはそうだろう。

好きな男の横で一緒に寝たのだから。（↑決していかがわしいことは起こっておりません。普通に寝ただけです）

幼なじみのような曖昧な関係とはいえ、意識するものは意識する。寝ている時に抱きついたたくましい背中との感触とか、無邪気な寝顔とか。

いつの間にかスタンリーはかっこよく、凛々しくなっていたのだ。

小さい頃から一緒に遊んでいるために、なかなか気づかなかったが、スタンリーは剣の稽古を始めてから、めきめき身長とかも伸びて来ていた。

もうさすがに止まったようだが。

昔、ビーストに襲われたときも、背中に庇ってくれた。彼は大きな傷を負ってまで私を守ってくれた。

変質者に追いかけられたときも、彼が追い払ってくれた。

フェルムを何度も命がけで助けてくれたスタンリーは、フェルムにとって、『私の勇者^{ヒーロー}』なのだ。

自分を卑下することが多いスタンリーを励まし、支え続けて来たと言う自負が自分にもある。

だから、絶対に付き合う。

と朝に決意を固め、喫茶店で会ったのだが、昨晚背中に抱きついた時の映像がフェルム脳内劇場で何度もリピートされ、1人で真っ赤になっていたのだ。

「フィー。おい、フィー！　おーい、フェルムー」

「うわい！？」

「お前どこに飛んでってんだ。そんな幸せそうな表情して」

あなたの背中に抱きついたときを思い出してました、なんて口が裂けても言えないだろう。

「時間だ。行ってくるよ」

なお、フェルムが再起動しないため、スタンリーの昼食はミリが渡しましたとさ。

場所は変わって、帝国軍術学校正門前。

スタンリーはそこをくぐろうとしたその瞬間……背中からタックルを受けて倒れた。

なんとか、地面とキスする事態は避けられたが。

「よお！　スタンリー！　昨日は大活躍だったんだってなー！　よっ、色

男ー！」

快活そうな顔つきをしたこの灰色の髪の青年は、エリック・フリント。17歳。

スタンリーの親友で、帝国軍術学校の実技では次席だ。筆記は酷いものだが。

「お前いつまで背中に引っ付いてやがんだ！さっさと離れろ！」
ドゴオンッ！……、人を殴るにはおよそありえない音がした。

スタンリーが銃のバレルでエリックのこめかみをぶん殴ったのだ。

「ぐへっ！」

エリックは吹っ飛んで、後ろに来ていた女子生徒のスカートの下へと偶然潜り込んだ。

「え、きゃあああああつつっ！」

悲鳴。

エリック、鼻血を出しながら親指を立てる。

「何やってんだ……！」

スタンリー、跳躍して、重力落下を乗せた膝落としを打ち込む。

「ゲベッ！」

エリック、悶絶する。

スタンリー、その反動で女子生徒の方に倒れ込む。

女子生徒、スタンリーを抱きとめる。

「スタンリー様あ」

女子生徒、なぜかうっとりとした表情でスタンリーを強く抱きとめる。

スタンリー、胸に顔をうずめる。

「むー、むー、もがー！」

周りの男子、妬む。

「スタンリーの野郎オオオオ！」

「やはり、『細身で程よい筋肉』じゃないとモテないというのか！？」

「いや、彼が紳士で優しいからじゃないかな。それに女子生徒のピ

ンチのときはなぜかならずいるし、大体（ここから先はスタンリーに対する愚痴が延々と続いたために省略させていただきます）」

「何をやってるんですのオオオー！！」

スタンリーが窒息しそうになったそのとき、蒼い髪を風になびかせ、1人の女子生徒がすごい勢いで走って来た。

彼女は背中にしよっていた大剣を抜き、剣の腹で、思いっきりホームラン斬りをした。

「よし、今日も一日愉快に過ごせ、なぼべぼっ！」

エリックはまたも吹っ飛んでいき、女子生徒も竜巻に飲み込まれたかのようにすっ飛んでいった。

「うおっ!？」

スタンリーだけは、マト○ックスよけをして無事であった。

「あぶねえなっ！何すんだ！クリスティーナ！」

「スタンリー、無事でしたのね！」

その天然発言に、スタンリーは。

「お前が一番危ないわっ！」

ツツコミをいれた。

「まあ、そうお怒りなさらずに、行きましようスタンリー」

スタンリーと彼女——クリスティーナは腕を組み、スキップするような足取りで、中へ入っていった。

クリスティーナ・アルフドルフ。

帝国の貴族の1つである、アルフドルフ家の長女である。

帝国貴族にはめずらしく、慈善事業や福祉、孤児の保護に力を入れており、帝国国民の信を得ている。

次期皇帝は、アルフドルフ家の当主ではないのかという噂が帝国議会で囁かれている。

その関係で、クリスティーナはスタンリー達が暮らしている教会の孤児院に訪問したことがある。

その時、スタンリーはフェルムと一緒に孤児達の世話をしていたが、彼女の姿を見ると、冷たい眼になり、フェルムに「あとは任せる」

と言って、ビースト討伐へ向かった。

クリスティーナはフェルムにスタンリーがなぜあんなに冷たい態度をとるのか聞いてみると、彼女はこう答えた。

「彼は、この国の上流階級を憎んでいるんだよ。小さい頃に殴られたり、タバコの火を押し付けられたりしたからね」

そのフェルムの言葉にクリスティーナは絶句してしまった。

その後も、クリスティーナは教会の孤児院に足を運び、スタンリーと会話の糸口を掴もうとするが、彼は自分が来るたびに外へいってしまう。

しかし、転機が訪れたのは、ちょうど10回目の孤児院訪問のときだった。

城塞の内側、つまり内城壁の外側は安全なため、子供達を遊ばせていたのだが、ビーストが出現した。

『ボーンビースト…ソードタイプ』

その名の通り、体が骨で出来ているビースト。

個体によって違いがあり、この地方に出現するボーンビーストは石剣を持っているため、『ソードタイプ』と呼称される。

それが3体現れた。

彼女はこの時、自分の装備である、大剣グレートソードを持っていなかったため、丸腰だった。彼女は女だてらに大剣を振り回すことが出来るのだが、さすがに丸腰では勝てるほど強くない。

絶体絶命の危機のとき、スタンリーが空中から、ビーストに飛びかかり、その動きを止めた。

3体を1太刀で倒したスタンリーの剣の冴えに、彼女は眼を剥いた。

「な、なぜ、助けてくれたのですか!？」

スタンリーは彼女の顔を見ようともしせず言った。

「別に……ただの気まぐれだ」

クリスティーナからは見えなかったが、ホッとした表情を浮かべていた。

「そうですか……」

その真意に気づいているのかいないのか、クリスティーナは笑顔を浮かべていた。

「とりあえず戻りましょう。またビーストが来てもまずいので」「ええ」

教会に戻り、自らの屋敷に戻ろうとしたクリスティーナをデイビット神父が引き止めた。

「クリスティーナ君、もう戻ってしまうのかね？」

「ええ、あんな事件もありましたし、彼には嫌われているらしいですし」

「スタンリーのことか……」

クリスティーナが沈んでいる表情を見せると、デイビット神父は少し考え込み、言った。

「助けられたとき何か言われたか？」

「ええ、私が『なぜ』と問いかけたら、『ただの気まぐれ』だ、と言っていました」

クリスティーナがそう言うと、デイビット神父は笑顔を見せた。

「なら問題はない。それはスタンリーの照れ隠しだ。あの子は少々ぶっきらぼうなのでな。安心した顔を見せたくはなかったのだろう」「ではなぜわたくしと話そうとはしないのです!？」

クリスティーナはもっとも気になっていることを告げた。

出会ったときから彼に惹かれていた彼女にとって、もっとも重要な問題だ。

「あー。それは多分、貴族のお嬢様と話したことないからじゃないか？」

「わたくしと何を話せば良いのか分からない、と言うことですの?!？」

クリスティーナの勢いに苦笑しながら、デイビット神父は「行ってきたまえ」と手でスタンリーの部屋を示した。

コンコンッ！

ドアのノックを2回。

その間に息を整える。

「どーぞ？」

スタンリーの気怠げな声が聞こえた。

疲れているのかと心配しながら、クリスティーナは恐る恐るドアを開けた。

「失礼します……」

そろそろと自らの部屋に入って来たクリスティーナを見て、スタンリーは疑問符を浮かべる。

「ああ、あなたか。何か御用ですか？」

ベットに寝転がっていたスタンリーが言う。

「い、いえ……先ほどの礼をと思いまして……」

クリスティーナは俯きながら言う。

「ははっ！ 礼なんていりません」

スタンリーは初めて笑った。正確には、クリスティーナと話している時に始めて笑った。

その快活で少年のような笑みにクリスティーナの心は引き込まれた。

「いえ、でも……」

まだ俯いているクリスティーナに対し、スタンリーは笑ったまま言った。

「むしろ礼を言うのはこちらのほうです。チビどもの世話をしてくれてありがとうございます」

その言葉にやっと顔を上げたクリスティーナ。

「いえ、これも良い経験になりますので」

とテンパリながら出した言葉は貴族の責務、のような言葉だった。

「何をそんなに緊張しているのです？ あなたの方が身分が上なのですか？」

そう訝しげに聞いて来たスタンリーに「あなたのことが気になっていのです」などとは言えないクリスティーナは、

「……、と、殿方の部屋に入るのは初めてですの」

と返すのが精一杯だった。

「そうですか……」

その言葉を最後に沈黙が部屋を覆う。

スタンリーにとっては苦でもなんでもなかったが、色々と焦っているクリスティーナはなんとか会話の糸口を掴もうと、こう切り出した。

「そう言えば、自己紹介をしていませんでしたわね。申し遅れましたが、わたくし、アルフドルフ家の長女、クリスティーナ・アルフドルフと申します」

と言って美しい礼を見せたクリスティーナにスタンリーは見惚れていたが、彼女がこちらを見てくるのに気づき、咳払いをしてから、自己紹介をした。

「スタンリー。スタンリー・アークエッジです」

スタンリーは貴族式の礼など知らないなので、知っている最大限の礼——騎士道に乗っ取った例をした。

それに対して、クリスティーナは「あら？」と声を上げる。

その視線に気がついたスタンリーは相好を崩して言った。

「俺の剣の師匠が騎士なのです」と。

クリスティーナが次に聞いたのはどこの学校に通っているかだった。

「帝国軍術学校」と答えたスタンリー。

その返答に喜色満面の笑みを浮かべ、「同じ学校でしたか！」と喜ぶクリスティーナ。

それから2人は学校の話で盛り上がった。

スタンリーは彼女が学校で5本の指に入る実技成績の持ち主だと知り、非常に驚いた。

その美貌と立ち振る舞いから、『ブリュンヒルデ戦女神』と異名を持つことも、恥ずかしいのか顔を赤らめながら聞かせてくれた。

クリスティーナにとっては、彼の性格が自分の思っていたよりずっと穏やかなものだと言って、さらに気になる男性となった。彼の立

ち振る舞いのなかに覗く芯の通った確固たる信念も彼女にとって心地の良いものだった。

2人が話を終えたのはもう、太陽が山の向こうへ沈んでしまった時間だった。

「もうこんな時間です。お送りします」

スタンリーがそう言って椅子から立ち上がる。

「え？ あ、そうですね」

クリスティーナは名残惜しそうにスタンリーの部屋を見回し、伸ばされたスタンリーの手を取った。

教会の、子供達の『また来てね』という声に見送られながら、教会地区の入口まで来た。

「では、お気をつけて……」

「ま、待ってください。わたくしに対しては敬語は禁止です！ わたくしのことも呼び捨てで呼ぶことっ！」

「は？」

急にそんな事を言われたスタンリーはきょとん、とするが、数秒でなんとか理解し、了承した。

これがスタンリーとクリスティーナの出会いの結末であった。

クリスティーナが懐かしい出会いの記憶に思いを馳せているとき、全校集会ではスタンリー達を見送る、として1対1の実戦訓練大会が始まることが決定していた――。

第六話 ―戦女神（ブリュンヒルデ）―（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は実戦訓練の模様を書く予定です。
それでは。

第七話 ―生徒会長―（前書き）

またも新キャラ登場です。

今回は仕事のできるおねーさん！？

そしてスタンリーの出生の秘密の一欠片とは！？

第七話 ―生徒会長―

一対一の実戦訓練大会は全校生徒によって催されることが決定していた。

これを独断で決め、教論達にはかったのは生徒会長。

軍術学校始まって以来の天才と称され、絶世の美貌さえも持つ彼女の圧倒的なカリスマに、全校生徒は息を飲むことすら出来ない。

「どうも、皆さん。生徒会会長のエルフィーネ・リーベルトです。

今回、4年生の1年間の実戦研修の旅路を祝して、大武術大会を開こうと思っています。優勝商品は……………」

そこで彼女はもったいぶって、息を溜めたあと、宣言した。

「『私との一日デート券』です!!」

校庭がどよめいた。

言うまでもなく彼女は無数の男性から思いを寄せられている。

少し前に貴族に求婚されたとか。

そのあまりのカリスマゆえ、一部の女性から、百合的尊敬を受けている……らしいが良く知らない、というかそういうことはあまり知らない方がいいと思う。

そして彼女はスタンリーになぜか一目置いている。

彼女曰く、「将来、大物になって私たちの度肝を抜きそう」だそう
だ。

まあ、彼女の推測はある意味では当たっていたことになる。

ちなみにスタンリーは今どうなっているかと言うと、エルフィーネの発言に「もう少し自分を大切にしろよ……!」と言わんばかりに彼女を睨みつけたあと、頭を抱えていた。

スタンリーにとっては、自分を気にかけてくれる存在だけに、「何かあったら……」という心配があるのだ。

スタンリーはあまり自分の心配や弱い面を表に出さないで、表には分らないが、意外と彼は心配性なのだ。

このときの彼も、デイビット神父や、フェルムが見れば、エルフィーネを心配している様子がありありと分かったことだろう。彼女もそれに気づいたのだろう、スタンリーに向かって茶目っ気たっぷりな魅力的な笑みを送った。

スタンリーはその笑みに気づいて、いつもの穏やかな相好を崩し、へにやり、と力のない笑みを作った。

スタンリーがいた辺りは、いっそうどよめいた。

スタンリーとエルフィーネ。

実はこの両者、ものすごく相性がいい。

笑顔や、目を合わせただけで会話が出来るのだ。

エルフィーネはスタンリーに笑顔を送ったあと、また前を向いて言った。

「なお、対戦表は我々生徒会の方で組み上げてあります。朝のHRでプリントが担任の先生から配られると思いますので、詳しくはそのプリントを見てください。では、皆さん優勝目指して頑張りましょう！我々生徒会も参加しますのでどうぞよろしく！」

エルフィーネは一旦壇上から降りた。

「では、次に表彰と、生徒の方に届いた手紙を読み上げます」

『生徒に届いた手紙を生徒会長が読み上げる』——エルフィーネが生徒会長に就任してから新しく始めたことだ。

このことにより、手紙が届いた生徒を中心に絆を深めてもらおうという狙いらしい。

しかし、スタンリー曰く「あの人が面白いからやってるのさ」だそう。

エルフィーネが何を考えているのか分からないのが実情だそう。

表彰で名前を呼ばれたのはスタンリーとあと1人。

運動部の男子だった。

突然名前を呼ばれたスタンリーは驚いたような表情をした。だが、壇上に昇り、『帝国警察総監賞。貴殿は先日起きたアイテムシヨップ占拠事件——云々』

と言われたことで気づいたのか、きょんとしていた表情を引き締めた。ようはミリの事件だ。

彼の表面上は感じられないが、以外と熱血漢なところが伺えるのはここにある。

彼のもともとの気質なのかはよく分らないが、彼はなぜか事件に遭遇しやすい。特にフェルムのことだ。

いくら幼なじみとはいえ、普通ならば見捨てるほどのことでさえ、自らの危険を顧みず飛び込んでいくようなまっすぐさ。

まさに、彼に助けられた子供や女子から見れば、彼はヒーローなのだ。

自らが差別される位置にありながら、他人を助けようとする底抜けの優しさ。

少々ぶっきらぼうながらも、手を伸ばす面倒見の良さ。

しかし、彼はただのお人好しではない。

自らを差別するような人間には冷水のような冷たい態度を取るし、貴族の息子、娘からの上から目線の命令などは、辛辣な言葉でぶつた切る。

自らを認める人間しか心を開かない一匹狼なところもある。

彼が軍術学校でモテているのも、そのような性格からだ。

しかし、スタンリーは幼いころには敵意しか向けられなかったために、自分や仲間への敵意には非常に敏感だが、自らへの好意には核爆弾級に鈍感なのだ。

もう1人の授賞式が終わり——陸上部で優秀な成績を……どうたらこうたらということだった。

手紙の読み上げに移るとき呼ばれた名前はまたもスタンリーだった。ついでにエリック。

エリックは何の手紙か分かっているようで、平然としていたが、スタンリーは不審がったような表情を浮かべていた。

「えー、エリック・フrint君。妹さんからのお手紙です。内容は――」
エリックは家族からの手紙だった。妹からの『元気になっていますか？』という健康を気遣う内容で、スタンリーは少し羨ましげな表情をしていた。

「続きまして、スタンリー・アークエッジ君。フェルム・ヴェンジ
エンスさんからのお手紙です」

その名前を聞いたときスタンリーは盛大に吹き出した。
周りの男子達はスタンリーを睨み、女子達は警戒を深めていた。
恋する乙女としての勘がそうさせるのだ。

「内容は――」

とエルフィーネは美しい声で朗々と読み始めた。

『急にごめんね！』

『デイビットさんがね、スー君に重要な書類を渡し忘れてたんだって。今日の3時までにはギャラクシア公社に提出しなければいけないんだけど……』

『でも、デイビットさんは教会の仕事があって、離れられない、だよ。だから、私がスー君のところに行っても大丈夫かな……？』

『お昼休みぐらいに行くからよろしく、だよ！ あなたのフィーヨ
り』

いつもの口調の会長ではなく、フェルムの口調で話す会長を見て、
そのギャップにスタンリーは笑いがこぼれたが、会長はそれさえも
魅力的にこなすと、スタンリーとエリックに笑顔を向けた。

「何か補足はあるかしら？」

「いいえ、俺はないっす」

エリックはそう言ったが、スタンリーは違った。

「1つだけ、よろしいでしょうか？」と。

「ええ、構わないわ」とエルフィーネ。

そしてスタンリーはマイクを掴むと、壇上に上がり、女子に人気のあるその鋭い瞳で全校生徒を見回した。

そして口を開いた。

「皆さん、どうも。スタンリー・アークエッジです。えー。俺からは1つだけありますので、良く聞いてください。特に男子の皆さん！」

そこで、スタンリーは1度言葉を切ると、息を吸い込んで言った。

「フィーに手エでしたら問答無用でぶった斬ります！以上！」

彼の目はいつものように穏やかな光を宿してはいない。それどころか目の奥に炎さえも見えた……ような気がする。

そんな彼からマイクを受け取るとエルフィーネは穏やかに言った。

「質問はありますか？」

「はい！」

と1人の女子生徒が手を挙げた。

髪をくるくると縦ロールにした女子生徒で目鼻立ちの整ったなかなかの美人だった。

しかし彼女は貴族の出身でお高く止まっているため、スタンリーに対しても上から目線になるところがある。

クラスの女子をまるで牛馬のように使うところも見ているため、スタンリーは彼女のことを親の敵のように嫌っていた。

いや、スタンリーの親は誰か分からないんだけどね。

「スタンリー様とフェルム様のご関係は！？」

「どうなのかしら？スタンリー？」

とウインクしながらメイクを渡すエルフィーネ。

「えっと……俺とフィーは、まあ、幼なじみみたいなもんです」

「少なくとも愛称で呼び合うほどには友好的な関係なのね？」

とエルフィーネ。

自らが誓ったことを口に出すと、とても痛い台詞しか出そうにないと一瞬で考えたスタンリーは、そのすべてを知っているようなエルフィーネの瞳に向けて言った。

「ええ……」

そして、縦ロールの女子生徒のほうをさりげなく見ながら言った。

「フェルムを泣かせるような真似をしたら女子生徒だろうが男子生徒だろうが、問答無用で潰しますので。よくよく頭に叩き込んでおいてください」

彼は縦ロールの女子生徒が一瞬だけ考えた企みを見抜き、さりげなく牽制してから、自分のクラスの列へと戻った。

午前の授業が終わり、昼になった。

フェルムが作った弁当は、卵のサンドイッチと、ツナサンド、ポテトサラダというようなものだった。

それをすぐ食べ終わると、フェルムが来るのをじっと待っているスタンリー。

お前は忠犬ハチ公かつ！

スタンリーが待ち始めてから10分後、ドアからちょこつと顔が覗いた。

そのままのその顔はクラスを見回し、スタンリーを見つけると、天真爛漫な笑みを受かべると同時にドアが開き、フェルムが飛び込んできた。

「スー君！」

彼女はスタンリーに飛びついた。

そんなことやったらクラスの女子では避けられるのだが、スタンリーは彼女を受け止めた。そこにスタンリーと彼女の絆を感じて女子達は歯噛みする。

「フィー！」

そのまま2人の唇が近づいて……。

「ってそんなわけあるかつ！！」

うおう！地の文にツツコミを入れられた。

「スタンリー？誰と話してるの？」

スタンリーはフェルムを抱きしめたままだった。

耳元で大声を出されたらそれなりに驚く。

「いや、何でもない」

と言って、フェルムから離れ、彼女を観察するスタンリー。フェルムは麦わら帽子に淡い桃色の膝丈のワンピースという格好で綺麗というよりはかわいいというのが正しいだろう。

「似合ってる。かわいいよ」

スタンリーの無自覚なところは率直に褒め言葉が飛び出して来るところだ。

しかも、無意識に褒めて欲しいところをついてくる。しかし、鈍感であった。どうしようもなく、好意に鈍かった。

フェルムは顔が赤くなっている。

スタンリーは周りの男達のなめるような視線がフェルムに集中していることを感じ、彼女の手を掴むと、一目散に駆け出した。

向かう先は生徒会室。

あそこは安全だ——そう考えつつ、スタンリーは最上階へと階段を駆け上がった。途中フェルムがバランスを崩して危なかったのをどうにかキャッチすると、そのまま横抱きの体勢へと移行、廊下を疾走して、生徒会室に滑り込んだ。

「あら、2人で愛の逃避行？」

——しまった。この人がいたんだった。

笑みを浮かべて2人に詰め寄ってくるエルフィーネ。

彼女は全体的に余裕を感じさせる態度。しかし嫌みではなく、どこか人を落ち着けるような雰囲気がある。けれどそれとは逆に浮かべた笑みはイタズラっぽく、違う意味で2人を落ち着かなくさせる。

つまり、何かされるんじゃないかという、おかしい不安。向こう側が見えない不透明性。神秘的———という、褒め過ぎだろうか。

「あのっ、あなたは——」

「あっ」

2人の後ろへと視線をずらすエルフィーネ。それにつられて2人も後ろに視線をやると——。

「引っかったなあ♪」

楽しそうに笑いながらフェルムの頬をむにと押していた。

「わうっ!？」

それに驚くフェルム。

他にもフェルムに対して色々なイタズラがされている。

「会長、それくらいにしてください」

これ以上美少女2人の絡みの構図があると自分の何かが崩壊しかねない、と本能で感じたスタンリーはとっさに止めにはいった。

「会長……?」

かわいらしく小首を傾げるフェルムに理性が崩壊しかけたが、どうにか耐えて、エルフィーネを紹介しようとする。

フェルムの危険なところは1つ1つの動作が可愛さが秘められており、美少女なのと相まって、まるで野に咲く一輪の花のような清純な雰囲気が漂って来るところであった。

「ふふ、私はエルフィーネよ。よろしく。フェルムちゃん」

「あ……、はい」

「フェルムちゃんのことはスタンリーからよく——」

なぜ自分の名前を知っているのかフェルムはまた首を傾げたが、スタンリーの名前が出ると俄然目が輝きだした。

「言わせねえよっ!？」

はい、フェルムが持って来たギャラクシア公社のハンター契約延長の書類にサインをしているスタンリーのツツコミが入りました。

自分のあの惚気とも言えるフェルム自慢を聞かせたくなかったんでしょね。

あれだけのことを言っておいて付き合っていないっておかしいですよ
ね。

何か書いてて僕もむかついてきました。

「あの、スタンリーとどういう関係なんですか？」

スタンリーに好意を持っている彼女からすれば当然の質問だった。

「上司と部下ってところかな？」

相変わらず、真意の読めない笑みで言う。

「俺がいつあなたの部下になったんです？」

スタンリーは苦い表情を見せた。

「あなたの『牙』になることは承諾しましたが、『部下』になるとは言ってませんか？」

自らを束縛されることを嫌ったスタンリーはエルフィーネとある協定を結んだ。

あなたの『部下』になるのではなく、あなたの『牙』になろう、と。その代わり、稼業の賞金稼ぎで得た情報をあなたに送ろう、と。

スタンリーはエルフィーネと初めて顔を合わせて会話した瞬間、彼女の正体を察した。

もっとも、彼の剣の師匠である、カルシウス・シグマー元帥から漏れ聞いた話だったのだが。

すなわち、皇帝直属の秘密情報機関を預かる家の出身だと気づいたのだ。彼はエルフィーネがもう秘密情報機関で働いている事を後で知り、彼女を暗部に引きずり込んだ彼女の父親に激しい怒りを覚えたが、さすがに他人の家の問題に鑑賞しようとするほど馬鹿ではないし、そこまで熱血って訳でもないが、彼女が危機のときは迷わず助けにいくだろう。

スタンリーはそういう人間だ。

ちなみにスタンリーは軍術学校での異名は『牙狼^{ガロウ}』またの名を『生徒会長の牙』

この軍術学校では、最強の者、つまりは生徒会長を、実技試験で全体の次席、並びに3番手の成績を取った者が補佐しなければならなという校則がある。

スタンリーは実技では3番目、筆記では50番以内に入る。総合成績では10番以内に入る成績優秀者だ。

さらに教会地区の唯一の賞金稼ぎであるために、エンパイアⅡシテイではそこその有名な人だ。

彼に好意的な人は『大切なものを守るためなら、命さえも捨てる覚悟のある少年^{ヒーロー}』

彼を嫌っている人は『英雄気取りの偽善者』

見事に評価が割れる。

だが、彼を良く知っている人々や、彼の覚悟、信念の一端を見た人々は口を揃えてこう言う。「スタンリーは賞金稼ぎのトップの『伝説』に似ている」と。

これは何を意味するのか。

それは後に世界が驚愕する事になる真実の一片を示していた。

だがそんな事に気づくはずもなく、スタンリー達はお茶を楽しんでいた。

午後からは、実戦訓練大会の予選が始まる。スタンリーはAブロックの第1戦目に当たっていた。

だから、今の内に体を温めておかなくてはならない。

フェルムも一番忙しくなる時間帯になる。彼ら2人は門で抱き合い、別れを惜しんだあと、それぞれの道へと戻っていった。

それを生徒会室から見下ろしながら、エルフィーネは言った。

「あれだけのことでつきあっていないのだから、2人の鈍感ここに極まれり、ってとこね」

苦笑まじりに言ったその言葉に影のように控えていた2人が反応した。

「日常を監視していても、あんな感じですよ」

「いつも、オレンジ色の空気を振りまいてます」

顔も体つきもそっくり、この2人、双子である。

「そう、まあいいわ。シグマー元帥が特別に目をかけるんだもの。

彼にはきっと何かがあるわ」

「質問なんですが、彼が一年間の研修に出た場合はどうしますか？」

「陰ながらついていって。ばれないようにね」

「了解しました」

双子のぴったりとした返事。

彼女はそれを耳に聞きながら、傍らの書類に目を通した。

そこにはスタンリーの顔写真と経歴が。

そして皇帝陛下直々のサイン。

よほど重要な案件なのだろう。

「一体彼の出生にはどんなサプライズが隠れているのかしらね……」
エルフィーネはそう呟き、書類の項目をじっ、と見つめた。

そこに書かれていたもの、それは、スタンリーの母親について、一番可能性が高い人物について。

二国間戦争のもう1つの主役、ドラクシル王国の王女であった――。

第七話 ―生徒会長―（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちなみに、エルフィーネのモチーフは、弓弦イズル先生の作品『インフィニット・ストラトス』に出てくる、更識楯無です。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338z/>

ロード オブ ギャラクシア

2011年12月21日22時47分発行